

出会い ふれあい 助け合い  
**サロン あべの** NO.66

<サロン・あべの11月の出会い>

「マイ クオリティ オブ ライフ」



十一月のサロンは、もうそろそろコートがほしい空気の中、十一月十六日(土)午後一時〜四時、育徳コミュニティセンター研修室において「マイ クオリティ オブ ライフ」をテーマに開催した。先月、定藤先生にお話いただいた「社会福祉のQOL」をもとに、自分自身の生活の中でのQOLを考えてみようというもので、今回はその場の雰囲気味わってもらおうことにした。

QOLってなんだろう

「QOLということばは、お話を聞いてもやっぱり難しいと思っただ」

「でも、考え方としては理解しているような気がする」

「障害者が健常者に近づこうとするんじゃないくて、できないことはできないとしてそれぞれの生き方をすることだと思っただ」

「おしゃれをするのも大切なQOLだと思ってる」

「それには経済的な余裕も必要だね」

「余裕の持ち方が重要なんだと思う。精神的な余裕が必要なんだ」

「精神的な余裕ということではまわりからの中傷が障害になっている。仕事もしてないのにタバコをすってるとか」

「どうしても障害者は役に立たないという考え方がある」

「障害者の方でも、社会の中で何ができるかを考える必要があるんじゃないか」

「社会参加の機会が増えてきて、責任も出てきた」

エレベーターがなかったら

「ある目的地に行くときに、その近くの駅にはエレベーターがなくて、隣の駅にはあるってことがあるでしょ」

「そういう時には断固として目

地的近くの駅で降りる。エレベーターがないのが悪いんだから駅員に車いすを持ってもらうのは当然だ」

「でも大切なのは問題を駅員にどう伝えるかっていうことなんだから、駅員に感謝しないというのはおかしいよ」

「隣のエレベーターのある駅で降りていっても間に合うように余裕をもって出かけることもQOLなのかも知れない」

私の『こだわり』

「QOLのためには自分自身のライフスタイルをもつことが大切だから『こだわり』が必要だね」

「さっきの駅の話でいうと、人にものを頼むっているのは煩わしいから隣の駅ぐらいいだつたらそつちに行けるようしてる」

「頼まれる方としてはボランティアをしてもお金をくれることがあるけどこれは負担になる

んで、絶対に自分の懐には入れないようにしてる。お金を出す方のこだわりもわかるし」

「僕は『何にもこだわらないこと』にこだわってる」(笑)  
甘えるのがいちばんよくない

「二時間かけて自分で着替える人と、介助してもらって着替えて仕事に行く人の比較の話があったけど、二時間かけて着替えるのがその人の生きがいだつたらそれもいいと思う」

「介助してもらうのはいいけど、問題はそれで浮いた時間を何に使うかだよ。だれでも介助してもらった方が楽なんだから、介助してもらうのが当たり前だと思つたらダメだと思う」

「障害があるからって甘えるのはいちばん良くないね」  
いろんな人がいることが大切

「何年か前から車に車いすのステッカーを貼るようになった。障

害者でも飛ばすやつがいるんだつていうことを知ってもらうことも必要だと思う」

「障害者でも偉くなると障害を隠そうとするみたいだ。そうじやなくて障害者でもいろんな人がいることを示して、全体のイメージを高めていくことが必要だと思う」

「だからもつといろんな仕事をする人ができて欲しい」

「障害者どうしても頑張っている人に『あいつは軽いから』なんていう人もいる。いろんな人がいることを認めようとしななんだ」

仕事ってなんだろう

「さっきの障害者が社会の中で何ができてかってことだけど」

「障害者でなければできないこととは障害者運動だけど、普通に生きてること自体が大切な『運動』だと思う」

「じゃあ生きてること自体が仕

事みたいなものかも知れない」  
「生活が仕事と思つたらつらいよ」

「でも仕事が無くなるというのはつらいものだ」

「やりたいことが仕事でできれば本当にいい」

「まあ仕事といつてもいろんなものがあるけど、自分の仕事がどんな風に役だっているのか考えるってことも必要なんじゃないかな」

テーマが難しいこともあつて話も前後左右にどんどん広がってしまったが、熱のこもった討論が行われた。

この日の参加者は八名。ビデオ撮影は植松氏(まとめ 原田)



マイクオリティ オブ ライフ  
 オッペルとぞう

富田慶子

昔々に読んで忘れられない話の一つに宮沢賢二の「オッペルとぞう」があります。

森から出て来たぞうが、オッペルの仕事を手伝い働く喜びを知り、毎夜感謝をして眠りにつきます。が、オッペルは日ごと敵しい仕事を強いるようになり、その上大きな時計をぞうの首に掛けます。時間に追われ働かねばならなくなったぞうは、それでも疲れもいらいものだと思えていました。欲の深いオッペルは、ぞうが逃げださないようにと足に鎖を付けてしまい、ぞうはとうとう倒れたという話です。

私がこの話を時々思い出すのは、私も一時期ぞうとオッペルの気持ちになった事があったからです。

「障害があってもやれば出来る」と我が身を叱咤激励して、思いどおりに動ける自分に自信を持ちました。が、結果はぞうと

同じになりました。その後は、そろりそろりと辺りを見まわして、オッペルに捕かまらないようにと言い聞かせながら過ごしています。それでも時として、時計の首輪がチラつくことがあります。

なぜ、今この様な話が出てきたかと言いますと、サロン・あべのの今年のテーマは「クオリティ・オブ・ライフ」生活の質の向上。Q・O・L・L.」であり、それに基いて毎月の出合いを企画してきました。そして、十月・十一月に「Q・O・L・L.」についてじっくりと考えてみることにしました。定藤先生(十月のパネラー)からは、社会福祉の質の向上について話を伺い、質と水準は違うことを知りました。

質を求めることは、自分自信の物差しをしっかり持って、自分に合う物を見極める目がないと出来ません。他の人が持って

いる有形無形の「もの」に気持を捉えられ  
 ることなく、自分の生活の質を向上させて  
 いく意欲を養う事は、現代の物質社会では  
 難しいことだと思えます。客観的に自分自  
 身の生活をつめる時、自ずと方向が出て  
 来るのではと考えます。その時、障害者と  
 してマイナス面が多いかプラス面が少ない  
 かで、「質」に対する向上心の熱意が問わ  
 れますが、出来ることからせかず焦らず腹  
 八分目をモットーに、遊び心を持って自分  
 自身の「生活の質」を求めていく姿勢を持  
 って過ごしたいものだと思っています。

おしらせ

日 時 平成四年 一月十八日(土)  
 午後一時〜四時

場 所 後日、お申し込みの皆様ご連絡さ  
 せていただきます。

内 容 「にぎやかに 華やかに」  
 新年会!

会 費 二〇〇〇円(飲食代)

申 込 平成四年一月十五日迄に

問い合わせ TEL 06-691-1028 (富田慶子)

ナンペイの

ひとつこと&ふたこと<sup>16</sup>

大阪市リハビリテーション市民講座

その二

講座の一日目は、淑徳大学教授・日本福祉大学客員教授の坂巻 照氏と、東京コロニー常務理事の調 一興氏の両氏の講演。

「生きること 生かされること」と題して話された坂巻氏は、

『老人や、様々な障害者をはじめとするいわゆる福祉の対象者を「一般社会に迷惑をかけて生きていく存在」として捉えるのではなく、むしろ「いまの社会を住みよくする存在、いわば社会にとってへありがたい存在であると捉える。」そのことが、共につくる福祉社会へのひとつのあゆみであり「保護と隔離の福祉」から「地域なかに生きる福祉」に変える鍵になる』  
という旨をいくつかのエピソードを交えて

語られた。

といっても、一方的に社会を変えていくために老人や障害者を利用するというような意味ではなく、障害者を中心にしていうなら「障害者であるまえに、一人の市民である」という考えが重要であること、更に「市民として生きるためのリスクは自身が負うこと」を前提として、あくまでも対等な関係を保つことで誰でも暮らしやすい福祉社会をめざすということである。

坂巻氏は「してあげているのではなく、させて貰っているのです。そのお蔭で自分自身がとても優しい人間になれるのです」と言いつつ老人介護などのボランティア活動に励む方の話を例にとって、「差別」というものが福祉の対象者と社会との間にあたる無理解や未理解(理解しよう、あるいは

理解して行動しているつもりだが本当の理解には至っていない状態をさしている、と私は解釈している。(からだだけ生まれるものではなく、例えば「障害者のための」とか「老人のための」とかという「専用の思想」からも生まれてくる、とも述べられていた。

「福祉関係8法の改正とこれからの福祉」と題して話された、ふたり目の講演者の調一興氏。むしろこの様な演題より、東京コロニーという授産所形態の施設の常務理事といった立場から見た、障害者の就労についてのお話しを伺うことができれば良かったように思う。

翌日は、各自持ち時間三〇分というミニ講演が五題。ボランティアとしての活動報告や、スライドを使っているの自助具についての解説などバラエティーに富んだ内容だった。

そのうち、ADA(アメリカ障害者法)についての大阪教育大学非常勤講師で視覚障害者の娘 英弘氏の講演は新鮮なものだった。

今まで、ADAについての講演はなんとか聞かせてもらっているが、そのほとんどはADAを称賛したものだ。今回の話では「画期的な人権法」と評価しながらも、「有資格」という言葉で表される能力主義の考え方が根本的な問題として存在することをきっちり押えられていたのだ。

就労について言うなら、企業が障害者を雇う場合その障害者が働くために必要な環境の整備を義務付けてはいる。そうした設備改善などをしないで不採用にすれば、当然企業は罰せられる。しかしながら、最大限の条件整備をしてもなおかつ就労が困難ということになれば、その時点で雇用という範囲だけにせよADAから除外される。それは結局、「画期的な」ADAという法律をもってしてもすべての障害者をあらゆる面からカバーする事ができないことを意味する。



その他にも、狭くてスロープをつけることが不可能だと証明できれば、適用が除外されるというような細かなことから、連邦と州の法律が食い違う場合、混乱を起こすという様々な問題点の指摘も慎氏はされていた。

ADAという脚光を浴びている事柄が、少し色あせてしまったようで残念な気もしたが、締めくくりに言われた。

「これからの様にこの法律の理想を実行していくが一番の問題なのです。」  
 という言葉には説得力があり、多分に救われた気持だった。

講演された方々全員がそれぞれに言われた事を重ね合わせてみる。立派な法律を作るのも人間なら、便利なバスを走らせるのも人間。そしてそれらを使いこなしていくのは人間の心ではないだろうか。

翻って考えるなら「バリア・フリー」の社会を実現させていく鍵も、そんな人間の心のなかにあるのではないだろうか。

今年の「大阪市リハビリテーション市民講座」は、こんなことを学ばせてくれた。

南光龍平

井 感謝します 井

カンパ・ビデオカメラと備品一式・冊子  
 ・簡易アルバム・和紙人形・紙くすだま・  
 バザー用の品等ありがとうございました。  
 お礼を申し上げます。

十一月のカンパ 金一〇、一四五円

石田 律、植松菊雄、岡崎美智枝、

川灯リ、松本妙子、森田ゆきえ、

匿名二名様 (敬称略)

〇〇 サロン・あべの紙の

朗読テープが出来ました 〇〇

山本敏子さんのご協力で、サロン・あべの紙六五号の録音テープが出来ました。

バックナンバーは三九号から、六五号の分があります。五〇号は五周年記念紙になっており九〇分と六〇分の二本のテープに収録されています。

サロン紙朗読テープご希望の方は、富田までお申し出下さい。(TEL 06-691-1028)

阿倍野区ボランティア



研修・交流会

爽やかな秋空が広がった十一月七日(木)「阿倍野区ボランティア研修・交流会」が阿倍野区社会福祉協議会の主催で行われました。区内のボランティア方は、二台のバスに分乗して、伊丹市の「伊丹ふれあい福祉公社」が運営している施設見学へと向いました。

まず最初に着いた施設は、伊丹市立障害者福祉センター(伊丹市昆陽池二一十)でした。広い敷地にユニークな形をした三階建てのセンターが、明るさの中にゆとりをもって建てられています。障害者に関する全ての相談(医療・保険・法律・福祉・ボランティア活動・余暇活動等)に対応出来るようになっていて、設備も多様化され充実していました。

次の伊丹サンシティホール(伊丹市中野

西一四八一一)は、バスに乗って昆陽池を半周した所に在りました。こゝは、おとぎの国の教会か、ミニチュアのお城の様な三角錐のどんがり屋根がそびえたって



て、壁はモザイク模様。二階建てで、中央のホールは四一mの吹き抜けになっており、音響効果がとても良く音楽会やダンスパーティが開催されているそうです。ホールの周囲は、教養娯楽室や趣味活動の為の部屋

(陶芸・木彫・お茶室・音楽室等)が配置されており、高齢者が楽しく利用されています。この建物は、高齢者を対象に作られています。先の建物と同じく市民と共に利用出来るシステムがとられていると言ふことでした。

芝生の庭をはさんで同じ敷地内に伊丹市立老人保健施設「ケアハイツ いたみ」が在りました。病院から家庭に帰るまでのリハビリを主にした施設です。二階建てのペンション風のしゃれた建物で、談話室の吹き抜けになった丸天窓には色鮮やかなステンドグラスの天女が横笛を持って飛翔していました。四人一部屋で、定員五〇人。在宅老人は、通所で一日二五人が利用出来ます。明るくて静かで、ゆとりを感じらる建物でした。送迎用のシャトルバスも運行されていて利用者に便宜が図られています。

三施設を見学した後、バスは、交流会となる六甲荘へと向いました。昼食後の自由時間は、各々で異人館通りや北野坂界隈の散策やショッピングを楽しみました。帰着四時半。サロン・あべのから六名が参加しました。

# Volunteer Center

8

## 七 公私協働のボランティアセンター

の事例

社協のボランティアセンター（VC）への関わり方の事例として「VC武蔵野」を紹介したい。これは、市民組織でありながら市や社協と密接な協力をもって運営されている組織として、公私協働のひとつのモデルと考えられるからである。

武蔵野市といえば福祉公社が有名だが、それ以前からも在宅福祉サービスが積極的に行われ、老人食事サービスの配食などボランティアの協力を得たサービスも多い。

このため、ボランティア活動の連絡組織をつくることになり当初は社協内にVCをつくる計画であったが、市民組織の「ボランティア・ビューローを考える会」は、社協にVCができることは活動が社会福祉分野に限定されてしまうことや、社協が行政とのつながりが強いことなどから、市民組織が市や社協の援助を受けながらVCを運営する方法を検討していた。このため市では市民と市職員による「ボランティア対策プロジェクトチーム」に市民ボランティアシステム形成について諮問し、プロジェクトチームはボランティア活動の原則について検討して「社会福祉分野に限らない広



い範囲の活動を対象にする」ために社協から独立したVCを設置する方が望ましいとする答申を行った。この間の調整には約三年かかったが、これに基づいて社協の呼びかけによって社協から独立した組織のVCが設立されたのである。

VC武蔵野の特徴は、市民組織でありながら市や社協との間に「サポートするがコントロールしない」という原則がうたてられていることである。実際に市からは事務所として市の施設の貸与とともに社協を通じて人件費や事業費の補助を受け、社協からも運営費の補助や協力金を受けている。また、役員としても社協役員や市の幹部が選出されているが、これも運営委員ではなく主として監事となることによって、財政援助を行う立場から会計の監査を行うが、日常の運営方針にはできるだけ介入しないように配慮されている。

こうした独特なVCができた背景には武蔵野市の地域性や市民性が反映されていると思われる。しかし、こうした公私協働のあり方を考えることは、VCがめざすひとつの方向を示しているといえるだろう。

原田 仁

## 受けること・与えること

多くの担当している実習生が老人ホームで困ってしまったという。会うたびに、お年寄りから何か物を差し出されるのだそうだ。

実習生としてこういう場で施設の利用者から物をもたらすというものは、利用者から、彼女は悩む。彼女の目には施設のルールしか映っていない。自分が施設のなかで問題なくやっていけるかどうか、それだけが心配なのである。

ホームの寮母さんに聞いてみると、お年寄りがそれで喜んでくれるのだから、もらっておいたらと軽い調子でアドバイスを受ける。断ったら、あのおばあさん、かわいそうだなと彼女は思う。自分の立場だけしか見えなかった彼女が、相手の心情にまで気を配るようになる。

それで少し安心して再び部屋に行く。と、こんどは待つていたかのように紙

に包んだお菓子を手渡される。その様子を同じ部屋のとなりのベットにいる別のおばあさんがじつと見ていることに彼女は気がついた。その目は嫉妬しているようにも思えたし、自分も何かを贈らなければならぬかと思案しているようにも見えた。彼女は自分と相手のおばあさんだけではなく、その周囲の人間関係も視野に入れなければならぬと思う。それで再び悩むようになった。

そして次の日、以前より生き生きした顔で、おばあさんはお菓子を用意して彼女を待っていた。もう断られないだろうと安心していろいろだった。彼女にお菓子をあげることを何よりの楽しみにしている様子である。彼女は自分がお菓子をあげることで、何かをおばあさんに与えていることに気がついた。

そうだと、受けることは与えることなのだ。しかも、おそらくは最も美しい与え方なのである。それは、与えることにもないがちな驕(おご)りや高ぶりから免れている。もつとも謙虚で繊細な与え方は、受けることによつて行なわれる。

その老人ホームのお年寄りも、ちり紙に包んだビスケットの残りが、大学生の彼女には食欲をそそるほどのものではないことは承知のことではないだ

ろうか。にもかかわらず、それを大事そうに手渡すのは、そこに自分の心を表しているからだろう。それは象徴として、読み取られるはずの意味を秘めている。

ぼくは空想する、その人が幼い孫に手を引かれて夏の公園を歩いてきたころのことを。孫は一本の木の根もとに空蟬(うつせみ)を見つけ、さも大事そうに小さな手のなかにしまいこむ。幼い子は祖母にそれを与え、祖母はまるでそれが最後の夏であるかのように愛(いと)おしく受けるのだが、そこに与えることは受けることとして、受けることは与えることとして現れるのである。

受けることが最も美しい与える形であるのなら、与えることは最も恵みに満ちた受ける形なのだろう。何の負目もなく恥じることもないままに受けることがあるとすれば、それは与えることによるのである。

とすれば、人にとつては、受けることと与えることは目に見える形では異なるのだが、それによつて通いあう心は同じなのである。与える機会をもつたとき、もつとも恵まれた形で受ける機会をもつたときには、それが美しい形で与えることになるよう祈りたいと思う。

(知)



# 美智子のこんな話



岸田 美智子

「えっー  
岸田さんがラーメン食べるの!？」

去る十月二十七日の日曜日、環状線芦原橋駅近くにある総合福祉センターにて、「施設の障害者サービスネットワーク」(以下「外出サービス」と略)としては二回目の介助研修会を開きました。

この日は、約二〇名の車椅子など触った事もないという、新しい介助者の方々ばかりに参加していただきました。その年齢層は、小学生から六〇才ぐらいまでと幅広く、社会人や主婦の方々がほとんどでした。地域的には、外出サービスの新聞記事を読まれて参加された方々なので、和歌山や京都からの方もおられました。

この日の内容は主に障害者が話し、すこしでも言語障害に慣れてもらうようにしました。

まず、自己紹介をして、この外出サービスが出来てきた経過と現状を話した後、外出サービスで作った「介助の手引き」を使いながら、具体的な介助方法の研修に入りました。

車椅子については、福祉センターの外にも出て行き、溝や踏み切りの渡り方は勿論、階段の上り下りをしたり、障害者を車椅子から和室などへ抱かえて降ろす方法やトイレ介助も行いました。

そして、昼食の介助も実際にやっていたいただきましたが、私はこの時なんとなくラーメンが食べたかったので、ラーメンを注文

して初めての介助者に食べさせて貰ったのですが、この事が参加者で長い間A園にいて今は在宅のTさんには、非常にショックを与えたのだそうです。

Tさんもよく外出するのですが、介助者に気を使ってトイレに行かないようにする為、水も飲まず、食事はいつも食べさせやすい物ばかりを考えているので、ラーメンなんて食べた事がないそうです。

Tさんはこの日の帰り道で介助者に「岸田さんがラーメンを食べていた。すごいなあー!」と何回も言っていたそうです。

このTさんの言葉に、私も忘れていた介助者と障害者の関係がとてつもなく、障害者の生き方に影響するのだという事を、改めてしみじみ感じている日々です。

## 「夕やけ空のオニヤンマ」

「雨あがりのギンヤンマたち」につく第2弾「夕やけ空のオニヤンマ」が出ました。それはこんな内容です。

第1章～5章…子どもたちと作者の楽しいヤリトリが、おもしろおかしく弾む。その爽快なテンポは読者をライブの世界にいざなう。前回にないエピソード満載。

第6章…子どもたちと作者の会話が思いがけない方向に展開して…。第7章…子どもからのドットと届いた感想文に誘発され、思わず「現代教育」を主張する作者。

著者：牧口一二  
絵：吉田たろう  
定価：¥1800.  
申込先：おばけ箱

TEL 06-352-3647  
FAX 06-358-3920  
〒530 大阪市北区天満2-1-31  
百々ビル

阿倍野盲人福祉協会の

婦人部洋裁教室に参加して

馬越 郁栄

昭和四九年、阿倍野区ボランティア連絡協議会が結成され、多くの会員の皆様のご活躍なされるひとつにタカマ ヨシコ様、ヤマミエコ様を中心に七、八名の方が私たち(盲協婦人部七、八名)に洋裁教室を開いていただきました。

昭和五一年十一月から月一回ですが、今日迄十五年余の月日が流れて参りました。当事、盲協会長であったコバヤシ シメゾウ様の奥様がボランティアの会長で私たちの洋裁教室にも深いご理解をいただき、友人の方から中古の足踏みのミシンを貰ってくださり、また私も近所の方から同じく中古のミシンを貰ったりして、近くのミシン屋さんで電動式に直してもらい、二台のミシンでスタートしました。他の区にみられるような公の教室が開ける会場がなく、現在も悩みのひとつです。

でも、比較的閉じ込めりがちな私たちですが、少々の雨天の日でもボランティアの先生方に付添われ教室に集る皆は、狭いお部屋でしたが、明るく楽しい笑顔と笑顔。裁断していただいた材料を完成するまでは、長い期間を要しますが、出来上ったときのあの悦び。また、試着した姿を触って、皆で歓声をあげたりして。また、糸通し器を使い、ひとりでミシン針に糸が通せた時のあの悦びは忘れることが出来ません。

十五年余も教室が続きますとミシンもいたんできましたので、阿倍野区社協、またあるライオンズから、ミシンのご寄贈をいただきました。

平成元年春まで、私宅でミシンをお預かりし、会場としていたのですが、転宅のためオオシマ様宅に二年。そして、現在は(今年度より)カキオカ様宅に教室の会場をお願いしております。

今後も教室の皆様が、お互いに交流を深め、深い理解と信頼のもと充実して行くことを願ってやみません。そして、盲人各人の家庭に大いに役立つことを・・・。

(墨字訳 石田律)

「サロン・あべの」紙65号がみなさんの手元に届いて、新しかった表紙のタイトル文字に「(文字板を指で指して会話していた)あの斉藤さんが…、いい字を書いてはるねエ…」

「力強い字をうまくいかしたユニークなレイアウト」「うーむ!」といった感嘆の声が寄せられました。色々な感想をお聞かせいただき、今回のタイトル文字のイメージチェンジはみなさまに、親しみを持って迎えられたのだなあ…と喜んでいきます。(T)

編集人; サロン・あべの運営委員会・<サロン・あべの>NO.66[ '91.12. 7 発行] 定価¥100.

代表; 富田慶子〒545 大阪市阿倍野区阪南町6-3-26. 電話06-691-1028

表題; 斉藤孝文・筆

印刷; セルフ社〒545 大阪市阿倍野区西田辺町2-2-10-101. TEL.06-691-2365.